

企画展

門前町 芝山のあゆみ

上：成田・三里塚・芝山・松尾・大総・横芝沿線案内(大正15年)
下：絵葉書・芝山仁王尊全景(大正前期/白土貞夫氏所蔵)

【会期】令和2年2月15日(土)~7月26日(日)

芝山町立芝山古墳・はにわ博物館



はじめに

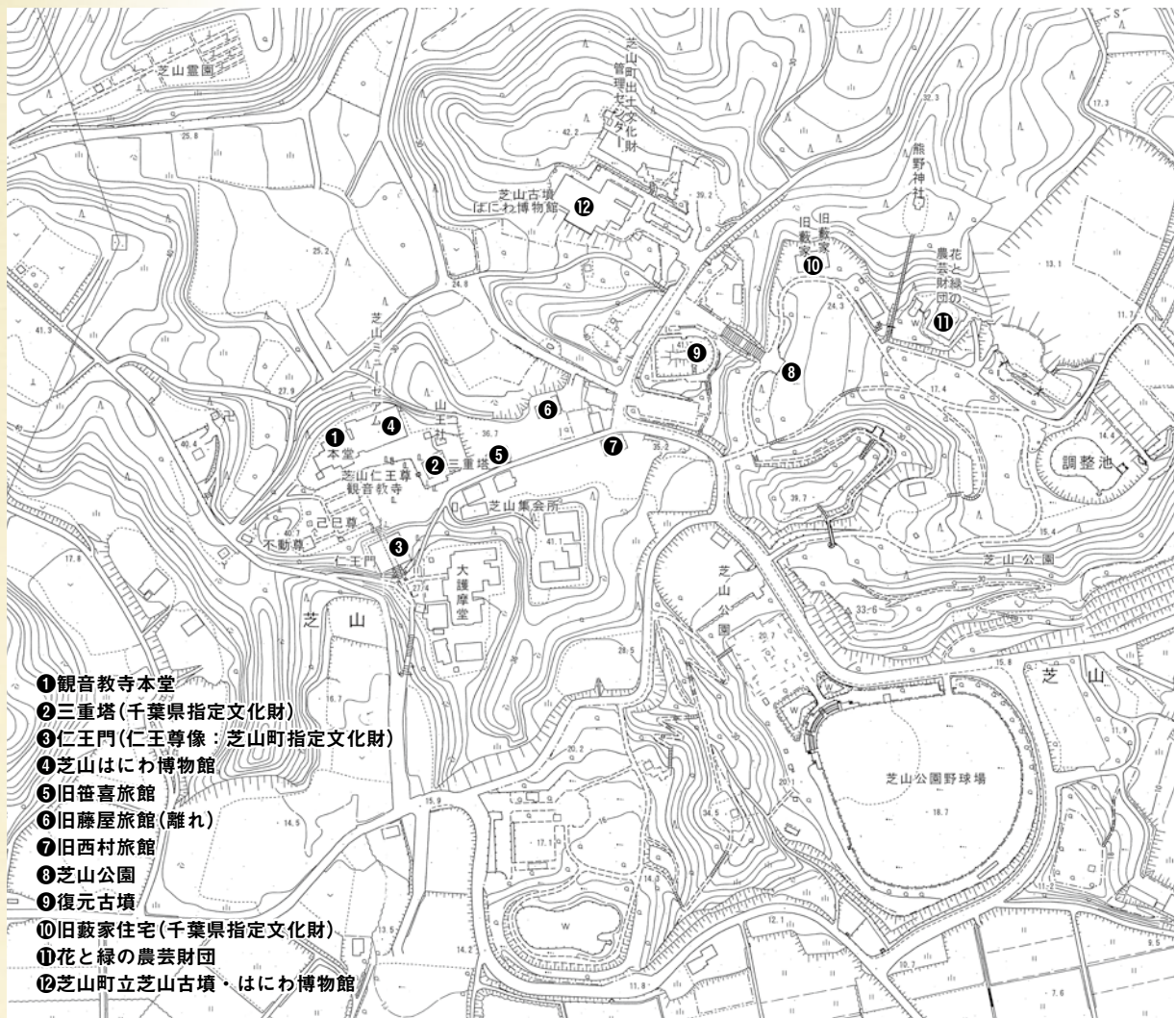
芝山仁王尊・観音教寺は、天応元年(781)の開基で、江戸時代には火事・泥棒除けの仁王様として庶民の信仰を集めました。門前には旅籠や商店も並んでいましたが、成田空港の騒音移転の対象となり、保存された3軒の旅籠がその面影を伝えています。

この門前の地区は、現在では芝山町芝山という大字の一つですが、江戸時代は武射郡芝山村で旗本領でした。その後、明治元年に観音教寺に柴山藩の仮藩庁が置かれ、大正時代には幻の鉄道計画があり、成田空港開港後は、芝山仁王尊や芝山公園を中心とした町の観光ゾーンへと大きく変容していきました。

本展では、芝山町の町名の由来ともなった芝山地区のあゆみを資料や絵図、写真などをおして紹介します。

凡例

1. 本書は、芝山町立芝山古墳・はにわ博物館において、令和2年2月15日(土)から令和2年7月26日(日)まで開催する企画展「門前町芝山のあゆみ」の展示解説パンフレットです。ただし、展示構成と一部異なることもあります。
2. 本書の編集・執筆は、学芸員奥住淳が行いました。
3. 掲載資料のうち明記のないものは芝山町教育委員会所蔵で、当館で保管しています。
4. 本展の開催にあたり、観音教寺、しばやま郷土史研究会、白土貞夫氏のご協力をいただきました。



I 江戸時代の芝山村と芝山仁王尊

芝山仁王尊は、正式には天応山てんのうざん観音教寺福聚院くわんおんきょうじふくくわいんと号する。奈良時代の天応元年(781)に藤原継縄つぐなだが征東大使として凱旋の帰途に創建したと伝えられる。天台宗の寺院で、本尊は十一面観世音菩薩である。中世には千葉氏の祈願寺、江戸時代には火事・泥棒除けの仁王様として江戸の火消し衆や商家の信仰を集めた。成田山とともに参詣する両山参りも盛んで、境内にはこれを記念する講社の石碑も建てられている。

三重塔(千葉県指定文化財)は、方三間、総檜造、銅板平葺き、高さ25mで、文政9年(1826)頃に建てら

れた。お堂形式の仁王門内の須弥壇上に安置されている仁王尊像(芝山町指定文化財)は、墨書銘により嘉慶2年(1388年)の造立である。

その門前は、江戸時代には武射郡芝山村となり、旅籠や商家も並び、小さいながらも門前町を形成した。寛政5年(1793)年の『上総国村高帳』によれば、村高230石で旗本(将軍家直属の家臣)の太田氏・大道寺氏・酒井氏の三人の領主により支配され、戸数は36戸であった。



観音寺境内絵図面 部分(天保12年/観音教寺所蔵)



芝山仁王尊遠景



仁王門



芝山仁王尊境内

コラム

芝山の地名の由来

宝暦年間(1751～1764)にまとめられた史伝書『総州山室譜伝記』には、「昔、芝山は寺地ばかりにて、俗家二、三軒のよし」「芝山は寺地ばかりなりとて木を植えさせず、よって芝山と申す」と記されている。

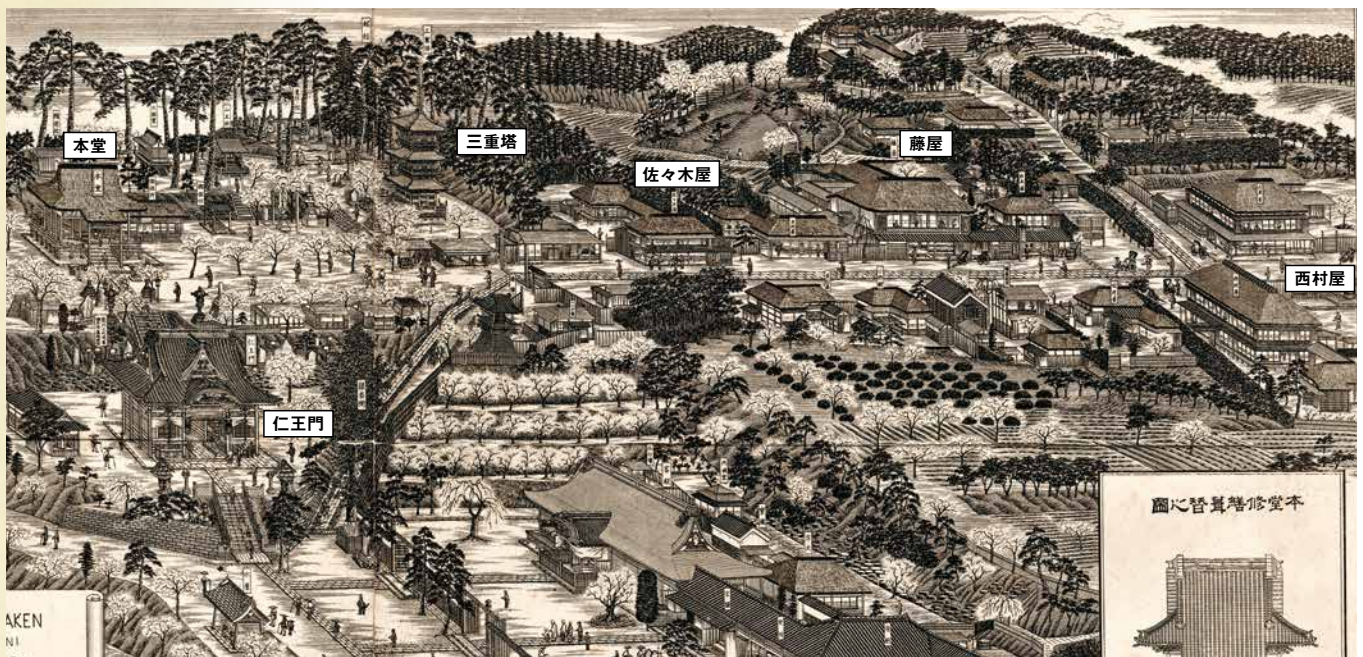
II 門前の町並みと旅籠

1 絵図と『芝山霊場志』にみる門前

芝山仁王尊には、境内の東側と仁王門前の参道に旅籠や商店が並んでいた。天保12年(1841)の『観音寺境内絵図面』(3頁)には、境内の東に黒門からあり、そこから延びる幅5m、長さ100mの参道の両側に12軒の旅籠が描かれている。また、明治26年(1893)の『千葉県上総国武射郡芝山村天応山観音寺境内全図』(日本博覧図)には東参道に7軒、仁王門前に2軒の旅

籠が描かれている。

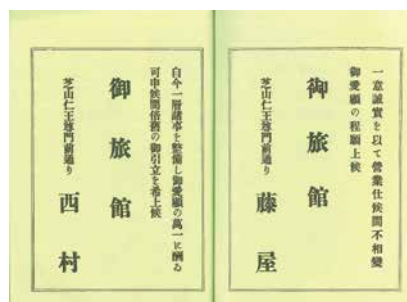
明治35年刊行の『芝山霊場志』は、門前に住む五木田真一によって芝山仁王尊の縁起や伝説、参詣の経路がまとめられた書物である。明治43年の再販本には、門前や周辺町村の旅籠や商店、浅草仲見世通りの料理屋の広告も見られる。その中に門前には藤屋・西村・笹喜・小藤屋の4軒の旅籠、菓子屋・力せんべい・飴屋・醤油屋・味噌屋・米屋・酒屋など12軒の商店、境内の休息所4ヶ所などが掲載されている。



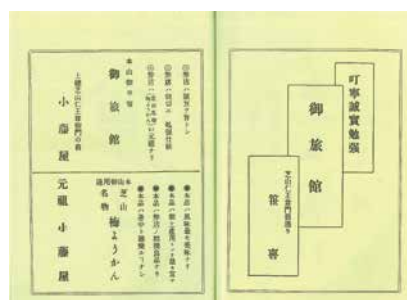
天応山観音寺境内全図 部分(明治26年)



芝山霊場志(明治43年再販)



藤屋旅館・西村旅館広告(芝山霊場志)



笹喜旅館・小藤屋旅館広告(芝山霊場志)



絵葉書・仁王門(大正後期/白土貞夫氏所蔵)

2 門前の旅籠とその資料

門前の旅籠(旅館)は、芝山仁王尊へ参拝する講社による利用が多かった。大正から昭和初期の旧笹喜旅館と旧藤屋旅館の宿泊者名簿を見ると、浅草・深川・本所・向島・日本橋など東京の下町がほとんどで、牛込・四谷・品川・蒲田、神奈川・埼玉・群馬など遠方からも訪れていた。また、旅館正面の軒下や帳場に掛けられていた講中札からも、定宿としていた講社の名前や地名を知ることができる。各旅館ではこの名簿をもと

に再度の参詣を勧める手紙を送っていた。一方で、旅館の利用者には、講社や参詣者だけではなく近隣の人々による宴会や集会で使用されることもあった。

現在、境内東側の参道には、笹喜・藤屋・西村の3軒の旅館だった建物が残されている。これらは、明治40年(1907)12月の火災により焼失したため、明治42~43年頃に再建された。昭和30年代まで営業していたが、成田空港の騒音移転の対象となり、門前の景観を残すため建物の一部が保存された。

旧笹喜(佐々木)旅館

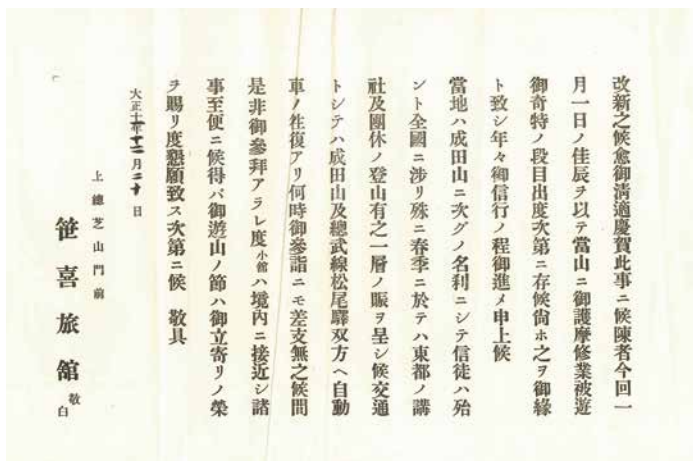
木造二階建て(寄棟・棧瓦葺)。一階は間口七間、奥行四間。ガラス戸九枚の店構えで、内部は土間の奥に板敷き大広間と料理場がある。二階の間取りは、襖仕切りの6畳・8畳・6畳の3部屋である。一階の離れは現存していない。



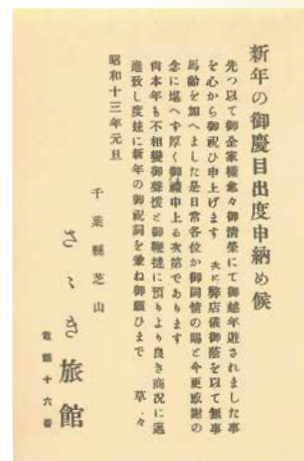
旧笹喜旅館と観音教寺三重塔



笹喜旅館各講社名簿(大正11年)



笹喜旅館参詣案内状(大正11年)



笹喜旅館年賀状(昭和13年)

旧藤屋旅館

木造二階建て(切妻・トタン平葺)で、間口七間、奥行四間の母屋は現存していないが、一階は土間、帳場、料理場、納戸、居室、二階には10畳2部屋、6畳2部屋があった。大正6年(1917)に増築された離れ座敷とその玄関、庭の一部が残されている。

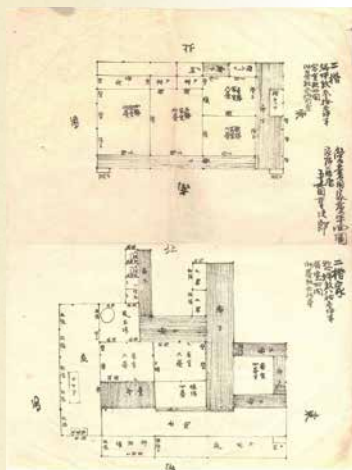


拜明講集合写真(昭和7年)



拜明講のぼり旗

藤屋旅館のぼり旗



藤屋旅館図面(明治43年)



旧藤屋旅館の講中札



旧藤屋旅館



旧藤屋旅館離れ

旧西村旅館

木造二階建て(入母屋・棧瓦風新建材葺)。一階は間口五間半、奥行四間半。北側と西側にそれぞれガラス戸4枚(各二間)の店構えである。



旧西村旅館

コラム

芝山象嵌扁額

芝山象嵌は、貝や象牙を花鳥人物などに象り、器物の表面に嵌め込んで立体的に仕上げる工芸技法で、芝山村出身の芝山専蔵が考案した。旧藤屋旅館には、木の下で遊ぶ子どもたちの様子が象嵌で表現されている扁額(鈴久甫造作、文化2年)が残されていた。明治時代には、印籠、根付、花瓶、屏風、衝立など様々な作品が横浜で作られ、輸出用の工芸品として人気を博し横浜芝山漆器と呼ばれた



Ⅲ 柴山藩から芝山町芝山へー近現代の芝山地区ー

1 柴山藩

明治元年(1868)、前年の大政奉還により徳川将軍家が駿河・遠江(現静岡県)へ移され、代わりに駿河・遠江の各藩が幕府領の多かった房総へ領地替えとなった。そのうち、室町時代の武将太田道灌の子孫である掛川藩主太田資美が、5万3千石で武射郡と山辺郡内から150ヶ村の領地(現在の山武市・九十九里町・芝山町など)を与えられた。

太田氏は新しく支配する村々に家臣を派遣し、村役人と会合をして年貢の目録を提出させるなどの準備を進めた。また、藩主が住み、政治を行うための仮藩庁を芝山村の芝山仁王尊に決め、これにより柴山藩と名乗った。家臣(藩士)も芝山村周辺に住む必要があるため、家族も含めて約2千名が付近の村々の寺院、農家に分かれて寝泊りした。寺院では本堂・庫裏、農家では長屋・物置に割り当てられた者もいた。家臣が分宿した村々は現在の芝山町域では、芝山村・山中村・高谷村・宮崎村・境村・下吹入村・上吹入村・大台



柴山藩年貢皆済目録
(明治2年)

村・殿部田村・新井田村・高田村で、町域外では中台村・牛熊村・山室村・木戸台村・遠山村・八田村など27ヶ村に及んだ。

明治3年11月、藩庁として築城した松尾城が完成すると松尾(現山武市)へ移転し、柴山藩から松尾藩へと改称したが、翌年7月に廃藩置県となった。



芝山と柴山

地元に残る江戸時代の古文書を見ると「芝山」村と表記されているのに対して、柴山藩関係文書では「柴山」としており、藩名として「柴」の漢字を当てたものと考えられる。

2 幻の鉄道計画ー成芝急行電鉄ー

大正に入ると各地で鉄道建設の動きが見られ、芝山仁王尊の和田静貫住職が中心になり東京成芝電気鉄道敷設の免許申請を行い昭和2年(1927)に成田ー芝山ー松尾間の免許を取得した。昭和4年には成芝急行電鉄と改称し、本社を芝山仁王尊に置いた。その事業計

画書の趣意書には、成田は鉄道の利便により百数十万の参拝者があるが、芝山は交通が不便なため約30万の講中は不便を感じていると記載している。また、その特色を成田山・芝山仁王尊・三里塚・八田の金刀比羅大神の霊場と景勝地の連絡や東京より九十九里に至る近道を挙げ、付帯事業として鉱泉を引き芝山ホテルを建設する計画であった。



成田・三里塚・芝山・松尾・大総・横芝沿線案内(大正15年)



成芝急行電鉄事業計画書(昭和4年)

しかし、成芝急行電鉄は政府から採算が見込めないことや発起人同士の不和もあり、昭和5年11月に免許は取り消された。



二川監視哨

昭和13年、太平洋戦争時に敵機の来襲を監視するために設けられた。現在の芝山公園入口付近の高台に高さ18mの望楼が設けられた。昭和18年に新監視哨に建て替えられた。



3 芝山町の誕生と芝山古墳群の発掘

昭和30年(1955)7月、二川村と千代田村の合併により、芝山町が誕生した。新町名は知名度のある芝山仁王尊と柴山藩にちなんだもので、門前の地区は芝山町芝山となった。

翌昭和31年には、芝山古墳群(殿塚・姫塚)の発掘調査が、芝山仁王尊濱名徳永住職の発案で、早稲田大学によって行われた。姫塚では、大型で造形美豊かな

埴輪が列をなして発見され、葬列の埴輪とも呼ばれ注目された。この発掘調査には、芝山町の青年団や消防団、婦人会などが協力し地域ぐるみで行われた。この発掘は、初めての町を挙げての事業となり町民の一体感を高めた。

出土した埴輪は、昭和32年に芝山仁王尊が設立した芝山はにわ博物館に保存公開され、昭和33年には、芝山古墳群が国指定史跡となり、芝山町を象徴する存在となった。



芝山古墳発掘の京成電鉄中吊り広告



芝山古墳繪葉書(表紙)



芝山古墳群繪葉書

4 成田空港と芝山地区

昭和53年(1978)5月20日、成田空港が開港すると、芝山町の約7割が騒音の影響を受けることとなった。芝山地区もその対象となり、30数戸のうち数戸を残して移転した。

空港建設に対する町からの要望の一つに、芝山仁王尊周辺の整備が含まれ、昭和63年に芝山公園が開園

し、隣接して町立芝山古墳・はにわ博物館が開館し、観光ゾーンとして位置づけられた。公園には芝生広場、復元古墳、移築された旧藪家住宅(千葉県指定文化財)、野球場などがある。

昭和57年には、町民が古代人に扮し儀式や行列を行う「芝山はにわ祭」が始まり、平成14年から芝山公園がメイン会場となり、芝山仁王尊でも儀式が行われている。



芝山公園と復元古墳



芝山はにわ祭(芝山公園)